



## Kobe Shoin Women's University Repository

Title	翻刻『歌狂 貞柳傳』
Author(s)	大谷 篤藏
<i>Citation</i>	文林（BUNRIN），No.12：60-104
Issue Date	1978
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 翻刻『狂貞柳傳』

大 谷 篤 蔵

ここに『<sup>狂</sup>貞柳傳』を翻刻するのは、この書が由縁齋貞柳伝の基本資料であるにもかかわらず未翻刻であることによる。さらにいえば、作者仙果亭嘉栗なる人物が、天明期の上方文人として留意すべき人物であり、本書の編纂態度に好ましさを感じるが故である。第一の点についていえば、本書は貞柳の家系生涯に関して考証し、その記事最も正確周到をきわめる。まず、貞柳の事蹟を年次順に掲出して、その事蹟作品の年次を、初出狂歌集あるいは実地の踏査にもとづいて考証し、しかもその拠る所の典拠を一々書中に明示している。本書は、その意味で一種の年譜考証とも称すべき学問的所産である。また伝者の態度に、近世の同類のものにありがちな、対象——この場合被伝者への心酔埋没が見られず、よく客観的態度を持しておる所、専門狂歌師ではなく、狂歌壇における傍観者の地位を占めるこの人にして初めて成し得た所と考えられる。作者嘉栗が本書の編述を思立ったのは、もとより栗柯亭木端を師として、狂歌を「あやしくこのみ、柳翁の直指、木師の単伝をうけたるこちづいのすき人」(春蟻序)であることによるが、直接の動機は、偶然の機から鯛屋の看板を入手したということによるというのもこの人らしい動機である。編述に着手したのは、貞柳五十回忌の天明三年(上四オ)、また井上春蟻の序文によれば、本書刊行の五年前、天明五年に春蟻が上京して嘉栗を訪ねた時、既に『由縁齋貞柳傳』という板下の一冊を示されたという。それが、天明八年の京都大火の災厄を経て、その欠冊を残燼の井の中から拾い出し、

Rights were not granted to  
include this image in  
electronic media. Please refer  
to the printed journal.

再び筆を採って仕上げ、寛政二年に上梓されたのが本書だという。貞柳没後実に五十七年に当る。

本書、半紙本上中下三冊。浅黄色行成表紙。題簽左肩黄紙單郭「歌狂」貞柳傳上（中・下）。翻刻の底本とした架蔵本には、発売当時の袋表紙とおぼしき次の一片が表紙見返に貼付されており、各冊奥に「三冊之内貞機」なる識語がある。貞機なる人物を詳にしない。

作者嘉栗の生涯の大概は、その墓碑に刻する碑文および三井高陽・小野圭史編の『嘉栗研究』に詳しい。別に門人嘉声編する所の「居士行状略」があるというが、今見るに及ばなかった。本名三井高業、通称次郎右衛門、字は公勤、幼名長次郎。南三井家第四代の当主で、延享四年正月八日京都に生れた。母はかの『町人考見録』の著者三井高房の娘である。宝暦十一年十五歳、半元服して八五郎と改称、尔後京店江戸店を交替して勤め、安永元年二十六歳にして、兄高邦の後を受けて家督相続、幕府御為替御用名前次郎右衛門を襲名した。

た。後天明四年三十八歳、家原家に養子に出していた庶出の長男（五代目高英）を復帰せしめてこれに家督を譲り、自らが家原の姓を襲うて家原長次郎を名乗り、尔後専ら文事を事とした。南三井家の当主として、三井一族の体制を旧に復することを計画したが、これよりおこった同族の内紛は、幕府当局の乗ずる所となり、寛政八年嘉栗五十歳の時、取潰しを生じかねない危機に際会したが、その時同族の責を一身に負うて決死の覚悟で赤坂紀州御殿に出頭して弁明につとめ、結局

彼一人が京江戸追放の処置を受けることによって危機を回避し、一族の危局を救ったという。すなわち妻子を携えて大津に移り、翌九年剃髪、和春と号し、同年五月大坂に転じ江戸堀に寓居した。寛政十一年四月二十三日没。享年五十三歳。墓は生玉寺町西方寺にある。正面に「由甲齋仙果嘉栗居士」とあり、碑の側背に、その行状を尽す長文の碑文あり、寛政十一年己未七月十七日皆川淇園の撰する所である。銘に曰く「富而不驕 灑脱知<sub>レ</sub>命 克復<sub>三</sub>其初<sub>一</sub> 保<sub>二</sub>厥宗姓<sub>一</sub> 晩節最高 優游戲詠」。その第三・四句に、文中に言及するを憚った前記の三井家危局の事情をひそかに寓しているものと見るべきである。別に洛西等持院に、嘉栗に先だつこと十年にして没した配、同族永井氏の出、鹿（寛政元年三月没）の墓あり、これに遺言により齒髪を埋めて合祀した。これにも淇園の撰になる短章の碑文がある。さて三井家では、一件落着後、高業赦免の事を、上野輪王寺宮を通じて請願していたが、文化十年正月その罪を赦された。実に没後十五年のことである。嘉栗は、前記永井氏鹿女との間に一男二女を得たが、次女は夭し、男虎之助また早世、同族安之允の男安之助政昭を養つて子とし、これに長女峰を配した。この政昭が本書に序する仙溪亭嘉菊である（碑文による）。狂歌の作もあるが、関更門の俳人として有名である。弘化四年没。

嘉栗幼にして読書を好み、夙に業を京の世継世齋に受け、後波井太室に従った。佐倉藩儒太室は、晩年天明七年藩主堀田侯の大坂城代を命ぜられるに従つて大坂に移り、翌八年度大坂の屋敷に没した。嘉栗の従つたのは江戸においてであつたろう。また小野圭史氏に従えば、片岡朱陵（熊本藩主細川重賢の侍読）にも従学したというが、確証を得ない。明和三年に栗柯亭木端の弟子となり、号を嘉栗、亭を仙果と称する。ともに木端の命ずる所という。また由甲齋と称するのは、京のその居が横町押小路の縦町油小路につき当るあたりにあったことによる。嘉栗の狂歌における撰者は、本書の他に、蕪村・応挙らの挿画を以て有名な『狂歌奈羅飛の岡』（安永七年刊）、『狂歌辰農市』（寛政十年三月刊）があり、同十年七月には宜

果亭朝省との共撰になる本端二十五回忌追善の『狂歌栗葉集』などがある。京都でも狂歌の門人がいたと思われるが、『狂歌道の栞』（文化八年刊）には「故仙果亭嘉栗社中」として、「驚石号盛栗亭 今バシ井池筋服部眞龍」「驚玉 かうらいばし井池天王寺屋清介」の二名を著録する。晩年大坂での門人である。

嘉栗はまた浄瑠璃作者紀上太郎として、

志賀の敵討（安永五年八月一日江戸外記座）・（姉は二十一）糸桜本町育（姉は二十一）

（安永六年三月十一日江戸外記座）

・（大山石尊 納太刀譽鑑）（平原屋東作・松貫四と合作、安永八年七月六日江戸外記座）（姉は宮城野 暮太 妹はしのぶ）

平記白石噺（容楊黨・烏亭焉馬と合作、安永九年正月二日江戸外記座）の江戸浄瑠璃の作があり、福内鬼外・平秩東作・烏亭焉

馬・井上春蟻（狂名問屋酒船）などの作者と親交を結ぶ。貞柳・本端などの流れをくむ上方狂歌人は同時代の江戸狂歌壇

と、ほとんど没交渉であるが、嘉栗は両者に交渉をもつ数少ない狂歌人の一人である。これらの人との最初の関係は狂歌によって結ばれたものと思われるが、三井家当主としての地位財力、京江戸兩店往來の日常、吉田冠子を最負にするなど演劇に対する嗜好の結果と考えられるものの、これも嘉栗その人のもつ専門狂歌師とはちがった洒脱さの然らしめる所であろう。ことにこれらの人との関係が、退隠前三井次郎右衛門として財務に軌掌中に結ばれたものであることが、そのことを示している。天明三年の『万載狂歌集』巻七には

三井嘉栗みやこにかへりける時

へづ、東作

富士きよみながめは駕籠の右ひだり長者のたびのはきもいためず

の一首がある。

嘉栗はまた大旅行家である。吉野山に遊ぶこと十三回、東奥・北越・常陸・兩肥・淡路・兩豊は概ね再遊したという。旅中常に画帖を携えて、勝景に接するたびにその景致を写し、また殊に滝を好んで各地の名滝をたずねたという。「長者

のたびのはきもいためず」とばかりはいかない。この旅行は、明和二年江戸勤めの間に、上州仕入見習の旅に出たのを最初とするが、商用の旅から次第に煙霞の癖を養ったものと思われる。たとえば大江丸旧国のごとく、当時の豪商によく見られる実用と風流を兼ねたものであったであろう。それにしてもその足跡は驚くに足るもの。同じ京室町の豪富万屋の二男左右二、百井塘雨の『笈埃随筆』の北越・長崎などの記事に、「嘉栗曰」として注記する所から見れば、あるいは塘雨、更にその友橘南谿とも交友のあったものかとも思われるが確証を得ない。自身にも狂歌記行『北国路之記』『よしの紀行』があり、また精細な播州の巡覧記などが稿本として残されているという。播州巡覧記は、脚本『けいせい播摩めぐり』の材料となったという。

本書に序する岫雲亭華産は、『狂歌生駒山』中の「作者実名 次第混雑」には「華産 浪花 大西千治郎」とある。家蔵に左のごとく、木端の華産宛書翰と華産の明和六年の歳旦懷紙を一軸としたものがある。

旦夕秋冷相催候所、弥御堅固欣躍存候。

然バ被頼置候青砥誠実之事実之絵上之賛、忝枚者和侑吾ニ順ジ、なめら川ト書付候。忝枚は名取の音便ニ響、なめりと書付進候。兩首尤醜作、漫書汚候。御一笑納可給候。已上

清秋四日

岫雲亭主人

木端 一

明和第六

試毫

岫雲亭

どのやうな百合雅どので有うとも

若えびす売る声を聞ては

としのくれ

すさまじい師走の月の鏡餅

とり粉や老のけはひなるらん

ふるとしに春たつ日

鷺もほゝうやまつて譽てやれ

ちくとなばかり春の来た冬

この軸の裏に、延竜舎渚丸なる人の書きつけた次の一紙が貼付してある。

華産老は梶川氏より別れし家にて、過書町銅座西角に住す。俗姓大西千二、又洗耳ト云。木端の門葉にて、夷曲道は立机し、栗洞・嘉栗同時の人なり

延寿坊水丸社中

延竜舎渚丸七十一老記之

弘化よつひつじのとし

むつまじ月のはじめ

販者の盤果亭拾栗は鴻池長右衛門、如叟亭栗洞は『狂歌生駒山』によれば「栗洞 浪花 村上 藤次」とあり、また同集中の木端の狂歌前書によって、初めは雪縁斎一好の門で、一塘と号し、一好没後木端を師として栗洞の号を与えられたことがわか

る。

『嘉栗研究』中に三井高陽氏の書かれた「嘉栗著狂歌関係刊本解題」によれば、本書『貞柳傳』の校正刷が現存する由であるが、今見るに及ばなかった。後日閲覧の機を期したい。

翻刻に当っては、読解に便するため、私に句読・濁点を付した。



狂 貞 柳 傳 上

油煙齋傳序

由緣齋の夷曲哥におけるや、貞柳前貞柳なし貞柳後貞柳なしと、奚疑のぬしの歎美せられしは、實金を欺くの詞ともいふべからんや。往昔三五の花の春、雄山の麓に出たつよりして、九くゝにいたれるの殊、たかき山端の月をめづるまで、くちずさミ給ひし哥ごとに、人の心のあめつちをもうごかすともいはむ」

〇一オ

ばかりとや。常に我にひとしき友なきことをかこち給ひしは、本哥に名だゝるかたゝも、期に臨ては誹諧哥なん幽に艶にものし給ふけるに、それらとても貞柳翁の風情にはことなる趣にや有けん。いはんや尋常の狂哥においてはさなるべからむ。諺に餅は餅やの類ひこれならんか。さりとて箔の小袖に繩帶の意味深長なるをしへをこゝろにしかとしめ」

〇一ウ

さとせし、我師栗柯亭木端の門に遊ぶ人、国くゝごとにすくなからず。そが中にもわきて花洛なる仙果亭嘉栗のぬしや、此門に秀られしとこそ、栗柯亭の遺稿にあらはしをかれけめ。その心まめにざへさときをもて、翁のはじめをはり、あるは氏族のあらましにそのとし月のよみ哥をまじへつゝ、こたミ貞柳傳といへる一帖となし、柳の末葉」

〇二オ

栗のおほえだのしげミ、こもくゝいやさかへよと梓にいのちながうせられける。そがはしにことはりをしるしねとあるに、まことやふる鑑のひくにもひかれがたく、板を撥ふものゝ類ひにことならずと、人の耳に口よする。それをもかへり見ずして、たゞそのもとめを償ひ侍るばかりにこそ。

寛政ふたつのとしはつ秋

浪華 岫雲亭華産（花押）」 〇二ウ

序

桃栗三年柿八年、柚は九年のそれならで、予ことし五年ぶ

りにして花の都にきのぼり、四方の梢の春に遊ぶつゝで、さる御公家様へ参殿するに、柿染の上下を着し、夷曲好の和尚殿を窺ふに、くりのもとまでたづねよりしなどはいふもさらに、あるハ洛東または嵯峨、花見がてらに逸子隠生を訪ふとて、番火繩の吸かけたばこにミちとひよりて、腰うちかけたるも、いづれえんのはしなるべし。こゝに仙果亭嘉栗ぬしは、ひなぶりにあやしくこのミ、柳翁の直指」

〇三オ

木師の單傳を受たる、こちづいのすぎ人也。一日酒狂を談ずるに、机上より油煙齋貞柳傳といへる板下の冊とうで、見す。予いふこれはさきに木にものして君が家原文庫に蔵せしならずや。あるじいふ。さればとよ、漸く功なりしを、往シじ都のひざくらにかゝりて、散こぼし烏有に属しぬるが、さちはひに欠冊を残燼の井の中より得て、ふたゝび心をつくし、校正すでになり、さらに剗劂に命じぬ。しかし、蛙の袋せまき才もてつゝりなせしものなれば、大海の批判はしらずかし。」

〇三ウ

されば其ことのよしをしるしてよと乞はる。やつがれ何をかいはん。ことさらこゑだミたるあづまうぐひす、竹のよのあざけりもはづかしけれど、花に啼水に住同腸の哥仲間、いなミがたうまた其功も賞せずんばと、我輩の交談<sup>マデ</sup>き水鉢なる石菖の一雫、矢たての墨に和しつゝ、柄ミちかき筆ぬきいだしてかいつけぬる。これが序といふものかといふ。

友人 東都 井上春蟻

問屋  
主人  
酒船  
戲筆

「〇四オ

「〇四ウ

貞柳傳序

古より狂哥者流おほかる中に、柳翁の風流世にさかんなれば、今や都鄙にしたふ人少からず。されば乃父嘉栗、おなじ道にこゝろざし深く、此翁の徳をかぞふるの余り、こたび櫻木にものして、貞柳傳といへる冊子を著せり。我此道をしらずといへども、蕉翁の一路をたどれ」

〇五オ

ば、月花のながめ外ならじとて、はしづくりをゆるされける事のいとうれしく、擁翠亭の窓の下に拙きを忘れて筆をとる事しかり。

寛政二庚戌菊月

鯛之額

經り二尺五寸

縁 表厚サ一寸

同 横厚サ二寸

絵朱置上ケ

地金

今ハ箱落て

はつかに間に

のこれり

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

仙溪亭

嘉菊

仙果亭嘉栗所持

仙溪亭嘉菊

「〇五ウ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

豎三尺 横巾二尺 厚サ一寸七分

縁巾一寸三分 縁ヨリ角ノ出 一寸二分

此看板今浪花難

波橋筋平野町角

鯛屋清兵衛方有

之

繪旨モ此家ニア

リ

丸坐金物 千重菊

惣金物真鍮地紋唐艸毛彫

文字金置上

上二ウ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

浪速園果亭義聚所持寫

上  
二  
オ

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

上  
二  
ウ

Rights were not granted to  
include this image in  
electronic media. Please  
refer to the printed journal.

上三才

口宣案之写

上卿 坊城中納言

明暦二年正月十一日 宣旨

藤原貞因

宣任 山城大掾

藏人頭右大辨藤原雅房 奉

雅房卿ハ万里小路殿

なり權大納言正二位

延宝七己未年六月廿

三日薨 四十六歳

坊城殿ハ權大納言

俊完卿 初頼豐

寛文二壬寅年正月薨

五十四歳 法名常空

上三ウ

油煙齋貞柳傳上卷

平安 仙果亭嘉栗述

むかし鯛屋貞柳翁は菓子を賣るを業とせられき。その家の  
軒にかけられし鯛を画がける看板の、ふしぎに我手に入り  
侍るも、ざれうたの道のかたはらをもふミ侍るえにしにや  
と思ふに、いと昔忍バしくて、浪花なる同志の人々に尋  
ねきこえけるにつれて、翁のありし世狂哥に聞えありける

事ども、または諸集のうち年頃のしれたる哥など書あつめ、猶なき世の跡の事までも、耳にふるゝにまかせて、そこ」

上四オ

はかと書しるして侍るなり。看板の我手に傳ハリしはさりし安永七戊戌年文月の事なりしが、今とし翁のいそぢの忌にあたれば、なきあとの遠くなるにもいよく昔しのバしく、ありし世やいかなりけんと思ふ人もあらんに、桜木にのぼせて廣く傳へんこそ追善のはしにもと、人々ゝのすゝめもことハリ聞えて、今すら事のわきがたきありて、ところゝ尋ねまどひしかば、後の幾世のすゑには、聞誤りさへ出来ぬらんとおもふものから、きしまゝをしるして、いさゝかも文花のことにあらず。ことかきのつたなきを見ん人」ゆるしたまへ。

上四ウ

抑油烟齋貞柳翁、姓は藤原、氏ハ永田といひて、攝州大坂の人。承應三甲午のとし生る。

私云狂哥時雨の橋集ハ、翁の弟貞我の詠を集し追善集なり。其序に貞我の傳あり。洛西鳳潭比丘漢文に書玉へ

り。其文に曰

居士姓、者榎並。名ハ貞峨。号ニ海音一。攝州之人也。其父貞因者、天資英敏、才思超群、嘗執三几杖於松永貞徳之門一、以風騷一而鳴于世一。母ハ永田氏。温而貞矣。下略

「上五オ

されバ実ハ榎並氏なれども、母の氏を名乗らるゝ事故有べし。翁の筆沢あまた見しに、榎並と書たるもの見あたらず。又永田ハもと医家にして、数代相續の系図有しが、翁没後紛失したるよし、南都念声寺和尚柳因息孫物語也。是によりしにや。京千載堂文石撰の俳諧家譜に貞因を榎並氏と書たり。

家号を鯛屋といひ、俗の名を善八イ忠兵衛  
又忠七トモ  
善八トモといへり。浪速御堂前雛屋町西南角に住す。世々菓子を製して業とす。

私云勢州四日市生川屋吉左衛門借屋、當時」

上五ウ

天満屋六右衛門住宅なり。裏に土蔵ありて、その柱に自筆にて、我宿は御堂の辰巳しかも角ようれますと人はいふなりの哥、書つけありしよし。先年失火の節まで

もありけるが、此土蔵大破已後いかゞなりしや。当時はなしと町内古老の咄しなり。

父を山城大掾貞因といふ。これも狂哥をよくし連誹にくハし。松永貞徳翁に従ひて古今、八雲、人丸等の傳をうけ、誹諧ハのちに貞徳門人安原貞室によりてまなび、又傳授口訣等ハ貞因より貞室」

上六才

に傳ふよし。そのむね狂哥戒の鯛、同落葉袋等に見えたり。

私云、落葉袋のはじめに

古今傳授 八雲傳授 人广呂傳授系図



如此し。貞室ハ延宝二甲寅二月七日没す。貞柳翁廿一歳

の時なり。續家土産集に享保十三戌申九月京にて柳翁八雲傳授したるよしの哥あり。貞室死去の年より五十五年」後也。又貞室に従ひたるよしの事、諸集に一切見え

ず。此事甚いぶかし。

貞室則家蔵の天水抄を貞因に傳へ、その書を家宝とするよしハ、俳諧家譜にも見えたり。貞因狂哥ハ、生白堂行風の寛文中撰し、古今夷曲集、同後撰夷曲集、銀葉集其外にも多く見えたり。又貞因弟を花実菴貞富といふ。これも狂歌に名有て、後撰夷曲、銀葉等に多く入れり。貞因嫡子貞柳貞因卅四歳ノ時生ル若かりしより、敷島の道に心をよせ、狂歌またたぐひなし。のちハ八幡山豐藏坊信海」

上七才

法印に学びてその名海内に溢れ、誠に此道の中興と称しき。実名はじめは良因といひ、また言因と改め、信海法印の一字をうけて、信乗とも信乗軒とも、或は精靈洞霜露軒、遍松子、放曠子又ハ平魚子己上月の鑑集木端開改に見ゆ、其外遊魚子机の鑑集、素能致に、珍菓亭続家土産集に、宗伯拾遺家土産集に、又ハ助栄亭、又円果亭、又生菴、又生軒、孝因、不月、因翁など、も書。鳩杖子永井走帆への手紙に見えたり、頭菴、又老發意月翁とも、前山州大司馬など、書し筆跡もありけらし。」

上七ウ

私云、乗合船集に

油烟齋の文字を、由縁・由圓など度々書かへられ

ければ申遣しける

由縁齋たび／＼かへる文字の関心尽しじや一色がまし

走帆

返し

柳翁

文字の関だうかくやらもしらぬ火の心尽しの我ハちら

往昔、生白堂行風おほけなくも

八宮御方

私云、爰に八宮と申奉るハ、京知恩院御門主  
開基、良純法親王にて後陽成帝第八宮也。

の仰を蒙りて撰

し、後撰夷曲集の中には、良因とありて

「上八オ

元日

書初ハあら玉づさか恵方なる神さま参るとし男より

けふこそハ正月なりと門へ出て飛んづはねつき遊ぶおさあ

い

綱引

親月<sup>ひ</sup>とて町／＼にする綱引ハあいや大勢の子どもあるゆへ

花厭風

吹風に花もやちると連哥師は句に苦をそへて案じぬる哉

寄三絃恋

三味せんのいとゝかはゆき君なればこまつけて只心ひき見

ん

播広の国にて双六を見て

「上八ウ

双六のよき手しかまのかちたしと目見出しひちをはりま瀉

哉

酒

瀧のミを絶ず久しくつゞくれバ上戸の名こそ猶きこへけれ

題しらず

何ごととも見ざるきかざるいはざるがよござるとさる人の申

き

已上八首入れり。古今夷曲集には柳翁の哥は見えず。則行

風の序に、明て寛文五年の冬、古今夷曲集を撰て 八宮御

方へ奉りしとあれば、寛文五乙巳年以前の哥ばかりなり。

柳翁ハ承應三年年出生なれば、此乙巳年ハ、僅に十二歳也。

後撰「

上九オ

夷曲集ハ、寛文十二壬子年板行なれば、同十一辛亥年まで



の哥を集めたり。されば、此亥の年ハ柳翁十八歳なり。置

土産集の跋に思貞竹述自三三五之春至三九九之秋ニとあれ

ば、後撰夷曲集の哥ハ、十四五歳より十七八歳までの詠なるべし。凡諸集の中、年比の見えたる哥、印行の書の中のはじめとやすべき。また行風の撰し、銀葉集ハ、延宝六年

十二月三日に撰し由、自序に見えたり。此集中には言因とありて、亡母孝養一夏九十首の中廿三首入たり。されバ亡

母妙因の没、いつとはしれねど、寛文十一年の後撰集撰の後」

上九ウ

なるべければ、柳翁十九歳より廿五歳迄の間なるべし。愛

香軒職鼻子の撰し、古今狂哥仙ハ、延宝七己未年板行な

り。此中にハ珙菓亭言因とありて、菓子に衣かけまぐも扱

かたじけな三輪のしるしの杉重の内　のうた入れり。勿論

貞因、貞富の哥もあり。

續家土産集に

延宝六年八月、石清水八幡宮に詣し時、豊藏坊に一宿し

侍りて　三国の山のうちでもふじは伽羅じやあのそらだ

きの煙見るにも、といへる哥の事ども尋ね奉るとて

上十オ

富士ハ伽羅百増倍とき、しりて鳩の峯にぞ登る此鼻

是則柳翁二十五歳の時にて、放生會再興の年也。

家土産集に

三十一になりけるとし

みそあまりひとつの春になりにけり守らせ玉へいづも八重

垣

甲子のとし

門に立る松のきのえにふく風はあら面白の琴のねのとし

此両首とも同じ年にて、貞享元甲子年の事なり。

續家土産集に

行年三十三の元日に　上十ウ

めぐり来る年は三十三番の福観音の冥加あらせ玉へ

是貞享三丙寅のとしなり。

私云、大坂北久太郎町せんだんの木筋東入南がわ、今来

氏新之丞所持一軸の写

古今三鳥の傳ありて、奥に

此一条千金莫傳之祕事なれども、此度愚老草菴をしつらひ、并ニ本尊造立の願望遂可申事、偏其方一人之助力によれり。是全哥道執心浅からぬ志を感じて、古今大事授与者也。

「上十一オ

貞享二丙寅九月吉日

契沖

鯛屋善八殿

右之條々其方懇望によりて、此度傳授せしむる也。努々

他見有間敷候。

宝曆八戊寅十月吉日

貞堂

今來貞思殿

俳諧并狂哥道統

此貞享二ハ乙丑也。さだめて三年の書損なるべし。この三年、柳翁三十三歳の時なり。翁より貞堂に傳へられしにや。貞堂ハ泉州堺安立町住」  
上十一ウ  
にて、翁の門人なり。貞思ハ貞堂の門人にて、傳へられし歟。されバ翁契沖子にも従ひ、哥道を学れしと見

えたり。

寶藏坊信海法印ハ元禄元戊辰年九月十三日僊化し玉ひけれ

バ

空だきの煙と今ハ消玉ふ富士ハ伽羅じやとよみ翁も

此とし柳翁三十五歳なり。

信海法印遷化の後、狂哥の道たどくしきと、東武浅艸大護院へ申上られければ、黒田月洞軒御事、やハた山豐藏坊に、狂哥をとり玉ふましければ、添削」  
上十二オ

を乞ひ申せとありけるゆへ、黒田家へ文奉りて

男山言葉の花ハちりぬれどなをたのミありむさしの、月

月洞子御返し

いやわれハあづまのえびす哥口も髭もむさくむさしの、

月

かくて、月洞子にも御賞美ありて、御消息の折から、

たづね来て廣きむさしの野鉄炮はなして見やれたまりやせ

まいよ

柳翁返し

鉄炮のたま／＼江戸にまいるともいかではなさん町人のミハ

又月洞子より嶋紵を給りて

津の国のなにはの春のはなやかに伊達をしまぎぬきて遊べかし  
「上十二ウ

柳翁返し

商人によき縮しまを玉はりて哥よみだてをするもはづかし  
家土産集に

庚辰正月 院参申上御菓子さゝげ奉りける祝に

雲の上にまうのぼりぬる辰の春ハ実も冥加にかのえなりけり

今としより御所の御用をきく桐の御紋を菓子の箱に書初

とあり。されバ庚辰ハ元禄十三年にて、柳翁則四十七歳の

時なり。元禄ハ 東山院御在位の年号にて、こゝに 院参

と書けるハ  
「上十三オ

靈元院法皇の御事なるべし。

又月の鏡集に

箕面山久円坊ハ、堂上の御ゆかりゆへに、

坊城どのへ、愚父貞因願の義を仰上られけるによ

り、明暦二丙申年正月十一日、山城大掾に任ずべき

のよし、菓子所の受領を押しける昔を思ひ出て

弁天のあたへハありがたいや哉名にしおひたるみのお山城  
滝津波雲の上より流れくる久圓坊の昔こひしや

とあり。此時、安原貞室の哥後撰夷曲集にあり」上十三ウ

御菓子所山城大掾貞因之

勅許の春 貞室

春毎の縣のめしの上にてても菓子及第にしくハあらじな

此年柳翁ハいまだ三歳なり。かくて父貞因ハ元禄十三庚辰

三月廿三日、行年八十歳にて身まかれり。よつて柳翁此春

より家督譲り受られ、かへらず禁裏御用をつとめたるな

り。さきの哥、今としより御所の御用をといへば、始て承

りし様なれども、左にはあらず。此とし家督をうけたるな

り。さて、その比にや、肥州長崎より、星野善方といへ

る」

上十四オ

人、菓子製の名人にて、浪速に來り、鯛屋に至り、さまざまの菓子の方を相傳す。名だゝる玉露霜も、此善方が製也。柳翁忝くも

女院御所へ奉りしに、山城大掾ハ石清水豐藏坊の門弟にて狂哥よめるよし、一首、と土方隼人殿をもて 仰ごとありければ、とりあへず

万歳と君を祝ひて奉る菓子も千箱の玉の露霜  
土方殿返し

奉る千箱の玉の露霜ハ世々に消せぬ菓子の名物  
とかや。おほけなき所にも聞え奉りて、玉露霜」上十四ウ  
とは、あまりはかなき名なれば、今より玉露糕と改むべき  
よし、御けしきありけるとぞ。此

女院御所と申奉るハ 靈元院法皇の女御、寛文九巳酉年十一月廿一日入内ありし、鷹司左大臣教平公の御女 房子の御方にて、正徳二年壬辰四月十四日雲がくれさせ玉ふ  
上西門院の御変なるべし。

又此比の事にや。有栖河宮の御方へうつし繪の新曆を奉る

とて

思はずよ繪にうつしたる月と日の雲井の奥にあぐるべしと  
ハ  
「上十五オ

かく申上ければ、梅花を画し扇を出し玉ひ、和哥よめとせちに 仰られけるに

梅がえに春の光りも照そひてふかき色香をあふぎ社すれ  
かくばかり雲の上にもその名をしられ奉りしなり。

己上、拾遺家土産、粟の落穂

また拾遺家土産集に

甲申のとしのはじめ、身を祝ふことのありて

けふよりハこのミようなるしとて登るきのえのさるの  
年哉

是宝永元年の事にて、柳翁五十一歳なり。

叔父貞富正徳二壬辰年五月六日身まかりける時」上十五ウ

我親のかたわれ月の影きえてあやめもしらずけふの六日ハ  
此とし柳翁五十九歳なり。

又家づとに

甲午の春

ことしより馬にくらまの御生にて老木のえだに花も実もなる

是ハ正徳四年にて、六十一歳なり。

又 筑後掾浄るり芝居を見て

いつよりも今度の作意飛園子ごだんにしたを誰もむまがる  
是ハ、国性爺合戦の浄るりの時にて、此浄留理五段續の初  
りなり。則正徳五乙未十一月朔日初日にて、」 上十六オ

此時柳翁六十二歳なり。

享保五庚子年九月十三日、信海法印三十三回忌に、男山神  
宮寺の墓に詣て

なき跡のしるしの石をきればかたしあふげはいよくぬる  
、袖哉

見し人ハ空にきゆれどふじハ伽羅詞の花ぞ匂ひ増れる  
此時六十七歳なり。

私云、柳翁、衣服或ハ傘桃燈などの紋に、百足を一  
文字につけられしよしなり。これハ家づとに

鞍馬山開帳に詣けるに、九折にてむかでを拾ひて

くらま山をあちらむかでぞひろひけめ是ぞ毘沙門天  
のあた」 上十六ウ

へぞとあり。此時よりの事なるべし。此開帳、享保

五子四月六日より百十日の間也。前の哥同年の詠也。

今ハ昔集に

七十歳に成ければ

車とハ音に聞しがかゝる身もよハひの春のめぐり来にけり  
柿本大明神一千年に及ぶ御時、正一位の 宣旨ありければ  
哥の道とくと熟しの柿のもと正一位とハむまいせんさく  
此哥よミ損じたとて、よミ直されしハ  
雲井にも御賞翫ある柿のもと正一位とは時節熟して

」上十七オ

此一千年回、享保八癸卯年三月十八日にて、柳翁七十歳の  
詠なり。

貞柳傳上巻終

」上十七ウ

貞柳傳中卷

仙果亭嘉栗述

續家づと集に

七十の賀の後も、足手違者にて、住吉へ二里余の道を歩行して、月参りし侍るを樂しみて

なりたいや松になりたや住吉の神のおまへに千代も参らんなじ比にや、家づとに

我身七十に及ぶまで、何の功もなく、いたづらにあかしくらし、なにはの事もいさ白波の舟遊びに行て

范蠡とさかさまなれやはぜ釣に小舟漕出て喰ふハれいはん

「中一オ

稀年の齢になりて

祖父ハ山へしばしがほどに身ハ老てむかし／＼の咄し恋しき

落葉袋集に

稀年の暮に

ひよつと出て思へば長の道中じや七十川もこゆるとし波

私云、一本亭所持自筆にハ、七十二歳の時とあり。

同 元日

大福を七そちの上祝へども千世の残りをこれへくだされ

扱享保九甲辰年三月廿一日、大坂大火にて、柳翁家も類

焼せしかば、しばし土蔵のうちに住居せられて「中一ウ

拾遺 くら住居江戸を移して朝夕の煙をふじと詠めくらしつ

生れたる時もそこらと聞なればやがて死なんと又くらに入

る

定家とハ似ても似つかぬ小ぐら住錢百人一首あるかないか

で

入口に土俵をひとつ階段にして有しを人の笑ひけれ

ば

定いゑの哥の力をたのむ身ハ石をふたつにわつて入くち

此ころの事にや

乗合船 あひ見ての後の心にくらぶれば昔ハ火事を恐れざりけり

此年父貞因廿五年忌に

鴈と共に別れし春を慕ふにも二十五絃ハことさらにこそ  
今ハ昔集に

「中二オ

七十一歳を長命と人のいひければ

稀なとハ何いはしやるぞ鶴ハ千代亀ハ万年仏ハ無量寿

梅雨の頃、藏住居もなりがたしとて、高津の別業、植木

や吉介が向ひに、菩提菴と号し、十六畳に佗住して、茶

の湯のミ老の樂しミとせられしを、或人不自由ならんと

いひければ

拾遺集  
うら屋にも住めバ都の心なり二でう三でう五疊六でう

又餅月夜集に

七十にあまりて

今生の花みなちりし身ハ老木菩提の種をなんぞ植たや

「中二ウ

已上七十一歳の詠なり。

翌享保十乙巳年の歳旦に

続家々と  
仕合せにむいてきのとのミを祝ひ人をも祝ふ千代の初春

同  
いつかさてこゝろの鬼ハ外へ出て浄土で年をとることをせ

ん

私云、此詠歳暮の詠の様なれども、詞書に七十二歳  
の春にとあり。

此年竹本筑後掾芝居にて、大友眞鳥の浄留り出て、初日九  
月十八日なり。大當りなりければ

梓弓ひくてハないか此芝居めつたまとりにあたりこそすれ

同年十月難波御堂へ 東御門主御下向のとき

「中三オ

連哥師里村昌築老兼て知る人なれば、取次にて奉りける哥

おほけなき御事を心に、かへり見もわかずかくなん

よみて奉りける

好果亭茶塾所持  
足曳の山より高き御恩かなお痛ながら衆生済度に

御前よろしきやうにと昌築へ申入るとて

うろくづもれぬ誓ひの網なればちよつと御前へまかり出

たいや

御盃を頂戴して

物の名も所によりてかわらけの御盃ともいひ油つぎとも

又續家土産に

「中三ウ

鷹司前殿下薨去の時、年来御出入申上ける冥加の  
為、御家来衆中へ恐れながらもかくなんつぶやきけ  
る

かなしふもなげくもおそれ多けれバ申上べきやうもなき哉  
御取次の方より御返し

悲しふといったみをあぐる心こそ田舎にをくハ惜しき山城  
此殿下と申奉るハ、享保十乙巳年十一月廿日六十七歳にて  
薨じ玉ふ関白兼熙公の御支配なり。心空華院と号し奉る。

去年十一月廿二日、浄留理作者近松門左衛門死せり」

中四オ

今年その一周忌に

察するに今ハ安楽国せんや拟も其後便宜なけれバ

己上八首柳翁七十二歳の詠なり。

柳翁はじめの妻ハ、攝津有馬の山口村井筒屋といへる家よ  
りめとられしなり。

拾遺家づとに

有馬の山口といふ所に、我妻の母なる人すミ侍りけ

るが、文の便に春の草／＼添へて参りけるに  
よめがはぎふきのしうとめ有馬山むこの奥とハむべもいひ  
けり

家づとに、先妻の母の十三回忌とて

「中四ウ

いろ／＼のぜん部をなしてとぶらはん春や昔のふきのしう  
とめ

此先妻の法名を、妙隆といひしか、置土産集に

妙隆三回忌

蓮葉におゐどすはるとくミてしるおもへバもはや三年じや  
もの

又落葉囊に

妙隆三回忌

桃栗を此三年に手向ばや柿八年ハ居まいこの身に

私云、此詠老年の詠の様に見へたり。妙隆死去いつ  
の比にや。追而可考。

柳翁ハ、男子なくして女子あり。是にむこをとりて養子」

中三オ」



とし、貞竹といふ。後竹の字憚る事ありて、柳因と改む。

是も狂歌よめり。

私云、秋の花集に柳翁哥あり。放生川納涼 涼しさ

に放生川にひれたつる我ハ鯛やの末の子にして 養子なれども家督をうけたれバ末の子とよめるなるべし

拾遺家づとに

雛や町の年より役を久しく勤め侍りけるに、養子をはじめて名代に出すとて

雛屋町のとしよりぬれバ礼にさへかへりに出すこの節供から  
「中五ウ

此頃より翁ハ家事をわたして

此春ハいもの子宝手に入りてあ、楽茶碗祝ふ大ぶく

かくありしが、程なく女子うせ侍りしよし、續家づと集に

娘を医者とめあわせけるに、一とせのうちに産後に

相果ける悲しひのあまりに

医者へやれば長いきせんと思ひしにあてが違ふたさんご十

## 八

此かなしひにかしらおろして

花と見るこずゑを風にさそはれてすばろ坊主になるや木男寮と

男子の跡にのこりければ

かたみをば祖父にのこして母ハあちへいのふ峠の孫ちやくし哉  
「中六オ

私云、心齋橋筋称念寺ハ柳翁の寺なり。則宗旨帳にハ、

正徳五未年の処にハ、柳翁聲源左衛門と云人あり。又享

保十一年にハ、聲玄柳医師とあり。同十三申年にハ、

養子勘右エ門といふ人有。同十六亥年にハ、甥貞竹、同女房など、有。此源左衛門、勘右衛門、玄柳、貞竹同人

の事歟、別人歟、未詳。柳翁実の娘名前しれたるハ、先

妻に四人、後妻に一人、又生玉光傳寺に南水童子とかや

早世の石塔あり。いづれも審ならず。

再考るに、称念寺宗旨帳、元禄十一丁年、貞柳「中六

同女房同娘はつ、同きち、同十三辰年ハ右の内へ娘なをといふ名入りて、同十四巳年娘はつぬけたり。是ハ死し

たる歟。

中七ウ

さゞれ石の千代に八千代と育しに卒都婆に苔のむすめはかなや　とよめるなるべし。寅年に生れ辰年に死する歟。されバ三歳なり。又宝永二酉年娘よねといふ名入り、同三年娘なをぬけたり。是他へ行か、死する歟。元禄十三辰年に生れたれバ宝永三年ハ七歳なり。又正徳元卯年ハ、よね母まさ同母栄正とありて、同五末年ハ、貞柳源左衛門といふ人入れり。夫ハ享保十一年年」　中七オ

には、貞柳、同妙正、きち、鐸玄柳とあり。されバ源左衛門といひし人、疑ふらくハ後医師となりて、玄柳といひしや。娘きちハ元禄十一に初て見えたれバ、此年生るゝと見え、源左衛門の名前初て入りし正徳五年ハきち十八歳なり。惣領娘はつ、三女なを兩人ハ已前にぬけ、末女よねあれどもいまだ正徳五年ハ十一歳也。扱又享保十三申年、養子勘右衛門といふ名あり。同十五年に娘むめといふ名前見えて、翌十六亥年ハ、甥貞竹同女房とあれバ、勘右衛門と云人ハ、もしや貞竹の俗の名にてハ」

なきや。むめといふハ貞竹の妻には相違なし。惣領娘はつ、名前ぬけたる年と、光傳寺石塔貞俊信女の年号よく合たり。されバ、さゞれ石の哥の十三回忌ハ正徳二千辰年の詠にて、翁五十九歳の時の事也。因ニ云、甥の字世俗にハおいとよめども、鐸の正字也。鐸ハ俗字也。

柳翁後妻ハ南都の人にて、高間市加賀屋方出也。此時ともに剃髪して妙正といふ。

置みやげ集に

朝夕の人剃髪の時

」中八オ

煩惱の種をもとめし年たけてけふハ菩提の花ぞ咲ける

その折から妙正にかはりて

しほらしき心ならねどあまとなれバせめて仏に歩ミはこばん

私云、後妻まさといひしハ、翁の妾なりしが、宗旨帳に、正徳元卯年に娘よね母まさと初て見えたれバ、此年本妻に直されしか。柳翁五十九歳時也。扱享保八年にハ妙正

と有。されバ、まさ剃髪して妙正と成りし時、翁の哥、  
煩惱の種を……ハ、享保八年の事にて、翁七十歳の時な  
り。始の不幸の時剃髪の」

中八ウ

やうに見えたれども、宗旨帳面にてハ、正徳五年に髡源  
左衛門名前見えたる斗にて、医者の名見えず。されバ、  
医者にやれバの詠聞えがたし。玄柳といふも、貞竹と  
いふも皆此剃髪より後の事なれば、いぶかしき事也。又  
一とせのうちに相果るといふ詞書の哥の、續家づとハ、  
享保十五年の板行なり。此跡にのころといふ男子ハ、こ  
とに嫡子と見えたり。又置みやげ集に、孫娘の名を、ふ  
きといふも、神の冥加あらせ給へなど詞書に見え、又三  
歳の時愛らしき」

中九オ

をなどいふ詞書の哥あり。此置土産集ハ享保十九年の  
板行なり。柳翁娘を嫁いりさせしその年、男子を産て死  
るといふに、ふきといふ三歳の娘あらん様なし。殊に置  
土産ハ、續家づとより後の板行なり。此男子後何といひ  
しかしらず。又家土産にさゝれ石の哥ありて、娘の十三

回忌なり。家づと又享保十四年の板行なれば、いよく  
その已前なり。さんご十八といひし娘とハ違ふか。光傳  
寺石塔に、貞俊童女 元禄十三辰九月廿四日とあり。」

中九ウ

此さゝれ石の娘と、さんご十八の娘と同人と見るとき  
ハ、天和三年の生れにて、柳翁卅歳の時なり。髡柳因寛  
保二年死るよしなれば、此娘と同年と見て、柳因ハ六十  
歳にて死か。されど老年まで居られたるやうにハ聞侍ら  
ねば、いづれさゝれ石の娘とさんご十八の娘ハ別人にう  
たがひなかるべし。

又、貞柳といへる号ハ、剃髪の時より事と覚侍れども、  
雛屋町に有之書ものに、元禄七甲戌年十月雛屋町年寄鯛  
屋貞柳と」

中十オ

あるよしなり。此元禄七年ハ、未父貞因存生にて七十四  
歳なり。柳翁ハ四十一歳也。されば俗牀の節よりの名  
歟。但し娘の不幸ハ元禄七年より以前の事歟。

又、貞因剃髪の事、いつとはしれねど、寛文十一年の後

撰集に、落髮の時の哥有。

貞因

正月と今ハ引かへ身のかざりおろして祝ふ小春也けり

又銀葉集に、法鉢せし春に

法鉢の我身の程をたとへなば老たる犬の年はじめ哉

「中十ウ

とあれば、戌の年の事と見えたり。貞因元和七辛酉年出生なれば、万治元年の戌ハ三十八歳、寛文十庚戌ハ五十歳、天和二壬戌ハ六十二歳、元禄七甲戌ハ七十四歳なり。いづれの戌にもせよ、父子とも同時に法鉢にてあらん事あるまじき事にもあらねど、すこしいぶかしき歟。後人考あるべし。

柳翁母妙因家ハ、嶋の内柳町柳屋何某といへる質商賣のよしなり。此柳の字の縁にて、貞柳と名乗られしか。いづれゆへ」

中十一オ

あるべし。永田系図にハ、貞因ハ貞室の諱とあり。

柳翁弟を貞峨といひ、医者にて、契沖に従て和哥を学べ

り。初ハ黄檗山悦山和尚に属して僧と成り、又還俗して誹

諸師となり、貞室に学ぶ。されども放蕩にして、豊竹越前

掾芝居の淨留理作などして、紀海音といふ。狂哥もよめ

り。誹書ハ、踊布袋といふ集あり。柳翁とハ不和にして、

義絶同前なりしが、後和睦したり。元文元丙辰年夏、法橋

位に叙せり。後撰夷曲拔書附録に、柳翁

「中十一ウ

そこ我眞子かしら子かしらねどもつゝ鯛やのひれなおとしそ

などよめり。柳翁も類焼以後、不幸つゞきてのちハ、店の事などこの貞峨にわたして、かなたこなたと居を移されし。その比の詠にや、續家づとに

隠居し侍りて、小座敷に自在の竹に釜かけて明しく

らすとて

方丈に似たるせまき我宿ハ維摩に問ん貧の病を

せまき所へ引込しを人の笑ふと聞て

せまくても我すむ庵ハ都ぞや量の数も九でうまである

扱、享保十一丙午年歳旦に

「中十二オ

年の名も神にねがひのえまなれバ誰もかいりやう満足の春

家土産集に

享保十一年の四月、牡丹花夢菴居士二百年忌、大仙

寺に於て、井上昌覺連哥千句興行の時、三愛の昔を

思ひ出て、先師信海法印の言葉の花を折て手向ると

て、我も色香なき言葉を加へ侍る

花

咲しより廿日艸とやはつかにも見ざる昔の人に手向る

伽羅

「中十二ウ

きく度に珍しければ二百年の後も初音の伽羅を杜たけ

酒

都としてしばし池田にすミ酒のにごらぬ人を誰も汲しる

同六月十六日、去御方江御菓子持参申けるに、臺を

失念いたしけるに、あなたより臺を給ハリて

幾千代といひのべにけり祝哥だいを玉ハる折を得て扱

机の塵集に

越前掾雪の段を聞て

越前ハ大上手なり雪の段きく人ごとにかんじ杜すれ

「中十三オ

此北條時頼記の淨留理、同年四月八日初日なり。

南都古梅園松井和泉掾ハ、柳翁かねて懇意也しが、家製の

大墨ふたつあり。方壺真人といへるハ角にして、徑リ一尺

四寸横一尺貳寸厚サ二寸五分重サ二十斤余、大玄鴻宝とい

へるハ圓形にして、徑一尺四寸厚サ二寸五分圍リ一尺八寸

重サ二十斤余、時ありて享保十一丙午年八月十五日

靈元院法皇御所御覽に入り、同年九月十六日禁中に聞え、

叡覽に入りしを、柳翁聞及バれて

月ならで雲の上まですみ登るこれハいかなるゆえん成らん

「中十三ウ

此哥世上に廣く称しもてゆくまゝ、誰いふともなく、油煙

齋くともてはやし、世に此うたしらぬものもなく、遠き

雲井の奥よりあやしき賤の男までも、油煙齋の名ハ普くし

りて、狂哥の道においてハ誠に譽なりし事ぞかし。それに

つきても、翁の詠どもくハしく狂哥訓に栗柯亭 木端撰述べられたり。

大墨のかたちハくハしく家土産集中にあり。

因に云、此大墨享保十九寅年三月十二日、関東の上

覧にも備はりしよし。

已上の哥、柳翁七十三歳の詠なり。

「中十四オ

享保十二丁未の歳旦に

享保も十二の宝箱が明ぬれば時絵に見ゆる門の松竹

又続家土産集に

了專尼玉章地藏再興の時

恋路かと思ひまいらせ候へば誠は眞如の玉づき地藏

落葉袋に 玉章地藏を拝して

よの中の世話ハ候べく候にして御縁を結ぶ玉章地藏

是則同年閏正月、京都藩谷小町寺地藏尊を了專尼といふ人

再興の時なり。

又、豊竹越掾芝居にて、長柄人柱といふ浄留り」 中十四ウ

出しとき

浄るりにながらの橋もつくるなりよう若太夫何にたとへん

此浄るり、同年八月十五月初日なり。此時由縁齋七十四歳

也。

又續家づとに

戊申九月、去ル御方八雲傳授し給ふ御相伴申て京よ

り下り、重陽に

哥の道大事をきくの露ばかり柴垣つくる我花園に

是享保十三年にて、七十五歳の詠なり。

享保十四己酉の歳旦に

「中十五オ

礼に来て御慶といへば御慶と答ふさてハあふむのとりのと

し哉

乗合船集に

己酉のとし

明初る光のどけし判金の桐にすむてふとりのとしかも

同集に

己酉正月廿日の朝、つもる雪に由縁齋のもとへよみ

て遣しける

走帆

さは姫のかすみの衣ぬひさしてけさ何すとつもるゆきたけ

返し、走帆ハ永井氏なれば

春の衣はつかに積るゆきたけをながい糸にてよい仕立際

「中十五ウ

同年閏九月、東本願寺御門跡大坂へ御下向の時、御礼に出てよみて奉る。

御法夏ハ九月加ハる時だにも人の心に阿くくあかれず此時、法鉢已後御剃刀をいたゞきて

おがみけり佛の御手とおもふにぞそぎてし髪に又おかうぞり

此折から、衣も着服の御免狀を受られて

出やらで我ハ浮世にすミ衣身にまとふのミ法のえにしに

同じく御酒一樽、鯛一連、昆布一把くだされければ

本願のおなさけゆへに行もせず閑をするめにあふてよろこぶ

同閏九月二日、よみて奉りける

「中十六オ

菊の間も閏九月の色見えて重ね疊の千代に八千代に

同じく新御門主よりも御酒一樽、御肴等くだされければ、

御礼に出られしに、御家老横田主水殿一首と所望あり

ければ

豊年ハ堅も横田も穂に穂にて主水門徒もともに繁昌

押つけて初対面から哥をよむ六条の御もんとゆるし玉ハれ手なれの鏡集に

東本願寺より衣御免ありし後、着して連哥の會に出けるに、人くあいさつあるに

油煙齋すみの衣ハきたれどもなまぐさ坊主鯛や貞柳

「中十六ウ

置土産集に

年老ぬれば法衣を着して

西行に杖と笠とは似たれども心は雪とすミ染の袖

同年四月廿八日、交趾国より大象わたる。これによりての狂詠さまくあり。その比 正親町従一位権大納言公通

卿、白玉翁と申て狂哥を好ミ給ひ、油煙齋の名聞召及ませられて、かの御方より御所望ありけり。

月の鏡集に

正親町従一位公通卿より貞柳へ、象の哥ハと仰ある

によみて奉りける

「中十七オ

またや見んかた野を通る大象のはなイはなに水ちるはたぐひも夏の曙

うどん華と思ふばかりに大象のはなまぢえたるけふハうれ  
しや

又

めづらしとはなのあたりに立よるハ夏にさくらの普賢象か  
も

など、よみて奉りける。又おなじ御方の竹の皮の画讃に、  
世ハしかり用ひやうにて小笠とも草履ともなる竹のこの皮  
と遊ばされ、貞柳にハ筭をよめと仰ありければ

初ものも竹のこのよの習ひとて終にハ老の杖と杜なれ

私云、象のうたこれに限らず、諸集にあり。永井「

中十七ウ

走帆への手紙の写

酷暑何方も——。象御覽井籠殿の庭の面鼻にぞんぶ  
んくふた饅頭

或人ノ曰、桑原殿御哥トナン。下ノ句いぶかしく

候。写しあやまり候歟。是を拝吟して

饅頭を鼻に捲こそくらめ山雲にほえねど象ハめづら  
し 下ノ句ハ昌察老も可被思召かと存候程ニ候哉。  
上ノ句位山ノ両通如何ニ被存候。御報に承度候。

十七日

鳩杖子

永井走帆老

「中十八オ

公通卿ハ享保十八癸丑七月十八日、八十一歳にて薨じ玉  
ふ。貞柳没する前年なり。

武者小路准大臣實蔭公もめで聞えさせ給ひて、狂哥御所望  
ありける。

狂哥訓に

由縁齋へ狂哥をのぞみけるに、よみてこしけるを見  
て申つかハしける

貞蔭公御事 栗風

置ミヤげにも有  
千金の牡丹に獅子のおどり出て目を驚かすはたらきぞかし

正二位實蔭公の懷紙を拜見して 貞柳「中十八ウ

哥のことハ申もくだよ御手跡まで具足したるハ武者様か扱



私云、置みやげ集に、右の両首ありて、その前に組題の詠十首あり。その次に此十首の題ハ金田平助持参有て、去御方より狂哥御所望のよし、下地ハすきなり御意ハおもけれバ取あへず讀奉るとて

お笑ひを耻ずに面あつくしておはん疊へ差上ぞする

とありて次に 實蔭卿の御哥あり。さすれば此前十首の組題ハ武者小路家よりくだされたりと見ゆ。 「中十九オ

實蔭公ハ元文三戊午年九月晦日七十八歳にして薨去し玉ふ。油煙齋没後四年なり。

姉小路殿にもきこし召及ばれけるよし、浪花竹比子所持の一軸、油煙齋消息のはしに見えたり。

追而京都ニ梶村丹治と申医師私懇意、頃日文通致候所、私ノ狂哥集両書共堂上方御披見被遊候而、田舎には奇特之義、此狂哥ハつねの狂哥といふにはあらず、俳諧の俳諧哥といふべき作意なりと、御尊御座候由、委細ニ被申候故 「中十九ウ

なにしおふ姉小路のはりよりも狂哥御覽に痛ミ入ぬる

姉小路ノ風竹亭様へよみて奉り候也ト。

私云、此風竹亭と申ハ姉小路頭中將正四位上實紀卿、宝永四年正月官を辞し、位記返上ありて出家遊バされ、風竹亭と申奉る也。

又置みやげ集に

南都西京薬師寺其外他僧御出有て、予が狂哥御吹率にて、京にても風聞よろしきと聞て

薬師寺の坊さま達に誉られて我うたながら捨もやられず

「中二十オ

象の来りし年の七夕に

七夕もことしハ象を曳て出て堂上方のうたやまつらん

また置みやげ集に

竹田近江身まかりしをいたみて

ちつとしたからくりなれど玉の緒ハ竹田近江も力及バず

私云、これハ二代目の近江掾にて、同じとしの九月

十九日死せり

是由縁齋七十六歳の時の詠なり。

今年七月家つと  
集開版

又戎の鯛集に、有馬へ入湯の道の記あり。

我身七十にあまり、その上息災なるに湯治ハ

慾深しとある人のいふに

「中二十ウ

イ我ハ只哥の病の有馬なる  
狂哥にも腰の折る、ハ嫌ふゆへ湯へそろ／＼と足曳の山

此外いろ／＼狂哥あり。連哥などもありて、先妻のさと山口村へも立よりし事などありて、奥に享保十五庚戌中夏とあり。糸の錦集に

庚戌の春潘山子が歳首句帳に加入

名にしおふことしハかのえいぬ筑波誹諧哥をいざ試みん  
拾遺家づと集に

享保十五庚戌十月十六日の夜、誰ふるゝとも」

「中廿一オ

なく、夜あけなば水に毒あるよいひながし、家ごと  
に我も／＼と井川の水を汲けるに、翌日走帆のも  
とより おこし廻る訳はしらねど人なみにほんの寝  
耳に水ハ汲けり 又、岡本流水哥に 夜のうちに人  
がおこせばおきのりと訳しら川のミづはくむなり

とある二首の哥をかいつけて贈りけるを見侍り、我  
ハわくと桶を上下にをきて

わく説と思ひながらも家なみに先よのうちに汲で杜おけ

此時七十七歳なり。

今年統家土座  
集開版

「中廿一ウ

私云、爰にひとついぶかしき事あり。隣町丁代弥  
助、四十一歳にて心地あしかりければ、厄にやとあ  
りけれバ柳翁とりあへず

厄かとしてきゝにきたの町弥介殿會所やしきにやくハ  
御座らぬ 此哥後により直されて

千鶴万亀の春を祝ひて

八まんぞ神にひかれて弓やすけ會所やしきハやくを  
かまはず 此自筆の詠、則浪花本町弥介方に今にあ  
りて、予も見たり。しかるに、享保十五庚戌年正月  
吉日、行年七十五歳書之朱印とあり。「中廿二オ

此享保十五年ハ七十七歳なり。いかゞの事にて、か  
く年齢二年相違あるにや。自筆に相違なきうへは疑  
ふ所なしといへど、又享保十九年八十一歳にて没せ

らるゝ事現然たれば、いづれにも此事いふかし。弥

介宝曆十一辛巳九月八日七十三歳にて死す。されバ

四十一歳ハ享保十四己酉年也。此時翁七十六歳也。

よみ直されたとときハ享保十五年なりしか。弥助四

十三歳なり。翁老年の事故、行年書のところ、万

書損にやとも覺ゆ。

貞柳傳中巻終

「中廿二ウ

貞柳傳下巻

仙果亭嘉栗述

又秋の花集に

辛亥のとしの春

としハいなりえとは神慮にかなふとの吉左右嬪しけさの大  
ぶく

置土産集に

日蓮上人四百五十年忌に

寒苦を經ひらくる梅の花の帽子今を春べと鳥も法華經

又月の鏡集に

生玉にて興福寺の開帳ありけるに

「下一オ

奈良よりもふたつの宝到着す玉ハ南の坊にありけり

此開帳、享保十六辛亥年にて、己上の哥七十八歳の時な  
り。

又秋の花集に、享保十七壬子年大小の哥あり。

福寿草桃より後の花あやめ梶のはたのも菊の大しも

きさらきや小雨ふる日は四五六を打くらしけり重五重六

又置ミやげ集に

竹田口上いひ甚右衛門身まかりしを

口上にぢいが出ねバ竹田芝居しやて齒のぬけた様に見えぬ  
る

此甚右衛門ハ同年四月五日身まかりしなり。

「下一ウ

同年冬八木高直なりけれハ

賤が屋も連歌座敷としらがゆのすゑを案じてくに杜ハなれ  
月の鏡

置みやげに

鳥路觀七十の賀に

十ばかり千世のあまりの我に多き連なる枝ハ花も興あれ  
此鳥路觀といふハ、舎弟貞峨の事なり。貞我ハ寛保二壬戌  
十月四日八十歳にて没す。柳翁に九年の弟なれば、七十の  
賀ハ享保十七年の事なり。

同年歳暮に

梓弓やそちになれどくらき身はめつた的なれや百もゐて見  
しよ

「下二オ

除夜

火桶かゝえあすくる春を待霄の待従の薰り伽羅ハ物かハ

此詠ども栗岑所持、行年書あり。

己上のうた七十九歳の詠なり。

同集に

八十歳に成けれハ

破魔弓をもて遊びしがいつのまにやそちの春や念珠のあら

玉

歳旦

いくつでも嬉しきけさの元日やいちそ千代めてあくが見た  
さよ

此詠と前の除夜の詠と一紙にて行年書あり。「下二ウ  
川崎や所持。歳旦の詠ハ嘉栗万ニも有。

上巳に

月の鑑  
八十になるてふ酒に花をうかめもゝとせまでハたつた一い  
き

置みやげ  
やそちでも末たのもしや三千とせになるてふもゝの節供祝

はん

丑の春賣買高直なれば

三かゆの此くるしミをのがるゝハ彼岸参りにひらく并当

此ころの事にや

嘉栗所持  
公界せぬ宿ハ聞わく事ぞなき米の高いも伽羅の安いも

同年卯月末より米下直になりしよしにて 「下三オ

米ハさがるやい時鳥ないたなら誰しも腹にたんのうをせむ  
また同集に

我身八十歳になれば、凡人間五十年といふふたりまへなれば

有漏路より無漏路に通ふ一休ミとくと雨風やめてゆかバや机の塵に

八幡山にて

松花堂へ登れど内へ得もいらぬ我ハ八十のけふに手習拾遺集に

やそぢの八月はじめつかた、こゝちわづらひ」下三ウ死べく覚えければ、辞世などしるし侍りしが、やゝをこたりてのち、月のさやけきを詠て

この比の風のひゞきの灘こえて病氣もなミの月を社見れ

私云、此時よりや、又生菴、又生軒の号ハつかれしと見えたり。或人所持の墨跡に

本ぶくを祝ふたん／＼丹波栗鬼ともくまん心地こそすれとありて、又生とあり。八十の暮に

机の塵

行く年の惜くもある哉びん鏡那智にて花をやるもけふ迄

機ミやけ

梓弓やそぢをいかでくらしけんだうゐるやらんしらぬ身に

して

攻の鯛

梓ゆミやそぢ經ぬれど猶ゐたや何を目當にするとなけねど

行がけの駄ちゃんとやらで老の坂坂東ぞくのとしをとらばや

八十年いつのまにやらくれ竹の雪見に飲て飄ふ一ふし

己上のうた、享保十八癸丑年、翁八十歳の詠なり。

私云、拾栗所持のうちに、享保十九寅歳旦とありて蜜柑かうじだい／＼ところくし柿のもとにほの／＼

とあかしいせ海老

行年八十歳とあり。此寅のとしハ八十一歳なるに、一年相違あり。これらも老年のうへの」下四ウ

事なれば書損もあるべきにや。かの會所やしきの詠の所も考合すべし。

置ミやげ集に

弘法大師、寅三月廿一日九百年忌に成けれバ

花の色ハ九百年さきにちりぬるを学び傳ふる人ゑひもせず

楠氏四百年忌、享保十九甲寅年三月廿一日湊河石碑

のもとにて御法夏あるよし聞て

机の座  
矢のごとしついで四百年たつか弓いたましやしかもけふにあたりて

拾遺家づとに

「下五オ

心地あしくて、菓子店に保養せしころ雪縁齋一好見舞に見えて

油煙齋ころもをかけて菓子店に出養生とハむまいせんさく とありければ返し

菓子にかへる衣の玉のことはハ無明の夢もさめておもしろ

かゝりければ、高津の菴より本家にも通ハれしと見えたり。もとより、雛や町の店ハ、さきに仕舞て、舎弟貞叡の息忠七といへる人、道頓堀太左衛門橋筋八幡筋にて、鯛の看板をかけ、菓子店を出されしよし。是ハ享保九年の類焼後、雛屋丁を仕舞てはるかちの事也。 「下五ウ

私云、此忠七も狂哥よみて、貞風といふか。則攻の鯛集に、貞我の法橋に叙せられしを賀すとて、その詞書に

老父忝けなくも法橋位を許し玉ハリければ、人々賀として錦口あり。愚子口をつぐむにやむことをえず  
不知讀によミける 貞風  
山城の司馬のいはりに法の橋かけ看板の鯛屋ひれふる と有。此外諸集に貞風の名ハ見當らず。

十寸鏡集に

乞巧集

「下六オ

したゝるうたきもの姫を祭る哉あはれやそぢに余ることしも

拾遺家づとに

八十一歳の秋なかば、やまひしてもはやたのもしげなく覚へければ、人々にもいとま乞をなし侍りけるに、堺に住ける大坂屋宗祐の、折から見舞に來り、いとねもごろにいたはりたまひけるに、かたみにもと、さえ行月に筆をとりて

今霄こそ月の桂の花のひるよとはさらに思ハれもせず

私云、此自筆の詠、今浪速藤井氏、鴻池藤八方に所

持なり。予一見せり。思はれものもの字」下六ウ下  
落たり。誠に類なきものなり。

かくて油煙齋ハ生涯月花はもとより、見るもの聞ものにつ  
けて、狂哥よまずといふことなく、世につれてのちは、や  
つくしく侍りけれど、心のたのしひハ捨る事なくて  
百居ても同じ浮世におなじ花月ハまん丸雪ハしろたへ  
南無あみだ南無阿みだ佛なむあみだ南無阿陀<sup>(マツ)</sup>ぶを辞世にぞ  
する

と詠すて、浪花高津の菩提菴にて、享保十九甲寅秋のな  
かば、もちの夜身まかれしなり。行年八十一歳。生玉下  
寺町光傳寺の庭に、しるしの石あり。貞柳言因居士と号  
す。

「下七オ

但し、外に妙言善尼 貞俊重女<sup>元禄四未三月廿八日  
元禄十三辰九月廿日</sup>とふる  
き跡あり。未詳。

貞峨に娘あり。<sup>初忠  
七妻</sup>これを柳翁門人百子といへるに嫁す。  
此百子、後誹諧師と成り、百子堂潘山といふ。塘氏にし  
て、誹書ハ橋柱、仙家杖等を著す。狂哥にては糸の錦等あ

り。忠七没後、菓子店の事よろづ此潘山引とりて世話を  
し、鯛の看板も此手にわたれり。其後桑名屋伊兵衛といふ  
者買とり、長堀白髪町にて此看板をかけて菓子屋を出す。  
これハ宝暦のはじめの比の事也。此伊兵衛ハ元来」下七ウ  
忠七手代にして、京町堀桑名屋六兵衛といへる者の子也。  
又 禁中様御免御菓子所の看板ハ、今平野町難波橋筋角鯛  
屋清兵衛方に傳ふ。名におふ玉露霜の方も此家に傳はれ  
り。山城大掾の繪旨も此家にあり。當時より五十三年以前  
に譲りうけられたるよし。是ハ貞柳没後、貞峨世話の比よ  
り、直に傳ふるなるべし。扱此桑名屋伊兵衛も、後はやつ  
れて店をしまひ、高津新地へ居を移す。しかるに、此伊兵  
衛に弟兩人あり。次郎兵衛、佐兵衛といふ。伊兵衛おとろ  
へし後は貞峨のゆかりを思ひて」

下八オ

にや、豊竹越前掾此人々を介抱して、道頓堀にて又々店を  
出させ、鯛の看板をかけたなり。しばし繁昌なりしが、伊兵  
衛、次郎兵衛もうせて後、店も仕舞て、弟佐兵衛此かんば  
んを所持して、性質惰弱ゆへ、そここゝとさまよひ、幽な

る脉にて今に存生なり。此佐兵衛より鯛の看板ハ我方に相傳せり。又柳翁存生のうちに善七といへる手代ありけり。

此者讀岐や町に亀屋といへる菓子屋ありて、これへ養子に行たりしは、柳翁存生のうちの事也。此亀や善七手代に佐介といふものあり。善七うせしのちハ此」

下八ウ

佐助、讀岐や町亀屋の店を世話して侍りしが、不仕合にてのちく貧しく、花をうりて今年<sup>安永七</sup>七十余歳にて存命

也。翁ハ善七が主人なれば、佐介も親方同前に鯛屋に出入して、柳翁の生涯、鯛屋の始末委く知りて咄せしをもむきをもて、今此傳をしるせり。鯛の看板も、此桑名屋佐兵衛、度々宿をかゆるとて取落し、破れたるを鏝にてしめよせあらんといへり。いかにも左の如し。又裏の方に、昔は柳翁自筆にて、天下一と書をかれしが、そのち波の氷といへる菓子を新に製せられしとき」

下九オ

天下一の文字をけづりて、玕菓波の氷と記されしよし。後は此波の氷の方つたはらずなりければ、けづりて無地ならんといへるも、詞の如し。鯛の画ハ、韓長老<sup>南禅寺</sup>の筆意を

学びし其頃の画工なりしが、名ハ忘れたりと云へり。残り多き事なり。佐助が咄しハ、秀果亭栗岑直に尋ねとひて、くハしく書齋らるゝに、又岫雲亭華産の、所く尋ね筆跡ども搜し求め、簾果亭拾栗ハ、久太郎町にて称念寺に近ければ、是によりて吟味し、その外同門の人々」

下九ウ

手筋あるに随ひて、よりどころあれば必つぶさに乞求めて、ある限り書とゞめ、ひとつにあハせ、猶古集を考合せて記し侍りぬ。佐助も予が方に看板の傳りぬる事を悦び、ありし世を思ひ出て涙とゞまらざりけるよし。翁の没後よそちあまり五とせばかりをへて、ふしぎにも我手に傳ハリ来ぬるよと思ふに、その始末きくにまた袂をひたし侍る。額となして住居の壁にかけてあふげば、翁のいき世にあへる心地して、よろこびたとふるにもなく、ふしてハ又ありし昔を忍ぶ袖のつゆけきは」

下十オ

さらに翁のうせ玉ひし秋にもおさ／＼をとるまじくこそ。

幾春もあハれハかけよかんばんの

ぬしはことばの花さくら鯛



我のミヤ人にも見せむさくら鯛

てぎわなうたハ家づとにあり

天明三癸卯年

仙果亭

平安

嘉栗

「下十ウ

因ニ云、一本亭芙蓉の建たる浪花新清水の石牌に、

翁ノ妻子先ニ歿シ以ニ嗣絶ニテ死ス碣之紀ニスル名字ニテ者ト

書シハ、いかゞ。養子柳因、寛保二年に没す。翁舎

弟貞峨も寛保二年まで存命し、翁の姪簪百子ものこ

り居、柳因子、翁の孫も男女数人残りて、今に存生

もあり。翁の先に没すとはいか成事にや。柳因に嫁

せし女は、先に失し事あきらかなり。案ずるに、芙

蓉もとより翁と世をへだ」

下十一オ

て、面會の人にあらず。また銘を誌せし林孝徳とや  
らんいへる人も、もとより翁と知己の人にあらねバ

と、そのことハ粗銘の詞の中に見えたればさもあ

らんかし。後人迷ふ事なかれ。又云、置土産集に

母の譲り置し硯箱見るめ恋しく朝暮取出して 翁

一柳の世々傳ハリし硯箱母のかたみと朝暮とり出て

此一柳とハ苗氏にや。可尋之。

「下十一ウ

又、餅月夜集に

忤初て小学に入年に成りて、故翁の持馴られし硯を

あたふに、折しも遠忌の日なりければ

柳因

寺入の孫に形見の硯の海見るめかなしや由縁齋なし

此硯いづかたに傳ハリしやきかまほし。

「下十二オ

由縁齋花押并印章

言因

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

貞柳傳下終

「下十二ウ

永田山城大掾藤原貞因

俗称善右エ門

元和十辛酉年生

明暦二丙申正月十一日受領

元禄十三庚辰年三月廿三日没寿八十歳

室 法名妙因 大坂嶋之内柳町柳屋某女

「下十三オ

貞富

号花實菴

正徳二壬辰年五月六日没

沙門有雄の山づと、いへるものに覆並貞富とあり。されバ誹諧家譜并時雨の橋の序に、貞峨を覆並氏と書けるハ、若叔父貞富方の家督を續げるにや。されども又母ハ永田氏と書し處いぶかし。

「下十三ウ

貞柳

実名言因 号由縁齋

承應三甲午年生

享保十九甲寅年八月十五日没。寿八十一歳。

生玉光傳寺に墳あり。翁ハ本願寺宗にて北久

太郎町稱念寺壇家なれども、後妻の姉法名宝

嶽栄林、浄土宗にて光傳寺<sup>知恩院末</sup>旦家なるによ

りて、こゝに印を建つ。

續家土産集跋に、可親軒日貞柳老人者逍遙軒

貞徳之裔也といふハ謬なり。

私云、可親軒ハ和州之産、学者ニテ隱者也。」

下十四オ

佐谷氏。柳翁ノ門人ナリ。

室 法名妙隆 攝州有馬之産

繼室まさ法名妙照 南都高間市之産加賀屋

當時江戸弓町に跡あり。かゝや角兵衛

寛保二壬戌年六月八日没

「下十四ウ

貞義

俗称喜左エ門後善八 僧ト成高節

匠師ノトキ  
契因 号鳥路観 浄留理作ニテ紀海音

寛文三癸卯年生 元文二丙辰年叙法橋

寛保二壬戌年十月四日没寿八十歳八丁目寺町  
宝樹寺に葬る。日蓮宗法名 清潮院海音日法  
居士

貞風 俗称忠七

「下十五オ

女 貞風妻 後百子妻と成る

潘山塘氏 号百子堂

室 貞義女

女 西尾春悦室 是ハ先妻の腹にして実貞義の女  
浪花医師

の産むところにハあらず。春悦室の話を、百  
子の妻ハ貞義の実の娘にハあらざるか。その  
故ハ貞峨存生の節、百子方へ来らるゝ折ハ、  
百子妻の詞に」

下十五ウ

伯父と呼ばれたるよしなり。猶出所可尋之。

柳因 実義子  
医師初名 貞竹 實和州郡山本多唐之助殿

家中知行五百石 岡瀬徳左エ門次男

寛保二壬戌年四月廿三日没

室 貞柳女 先妻の腹さんご十八とよみし女

継室 むめ 貞柳女 後妻の腹 後年嶋の内難

波橋筋酒邊町に住す。後南都念声寺に居す。

天明三癸卯十二月廿二日没す。法名實譽貞

照」 下十六オ

七十余歳

女 はつ 貞柳嫡女早世元禄十三辰年九月四日没

法名貞俊童女 光傳寺に印あり

さゞれ石のとよみし女なるべし。

女 きち 二女 宗旨帳に元禄十一より享保十一まで

見え、同年より聶玄柳名前入たり。もしやこ  
の玄柳に嫁するか。玄柳といふも貞竹・柳因  
も同人歟。

女 なを 三女 宗旨帳に元禄十三辰年初て見え、宝

永三戌年より見へず。

「下十六ウ

女 よね 四女 宗旨帳に宝永二酉年初て見ゆ。

早世 光傳寺石塔あり。南水童と斗ミえ、男女の間  
不明。

女 むめ 柳翁末女 後妻の腹 柳因後妻

男 柳因嫡子 さんご十八の女の子にて、いのふ

女 峠の孫ちやくしとよみし小児なり。」「下十七オ

ふき 柳因二女 むめの腹 享保十七壬子年

生 天明元辛丑年十二月廿三日没五十歳

ふきといふも富貴になりてとよみし女

法名 雪顔妙貞

男 幼名 亀太郎 後長七むめの腹享保廿乙卯年生

戒の鯛集柳因哥あり、詞書に

ことし二歳の小悴あり。伯父の長命をゆづら

んとて亀太郎と名づく。座敷の往来亀の水に

およぐことくなれば 「下十七ウ

蓬来におよぎつきたる亀太郎是ぞふつきの初  
願ぞや

南都念声寺居住、當天明三年四十九歳にて存

生。戒の鯛元文二巳年板行なれども、此詞の  
ことしといふハ元文元年の事なり。長七當年  
齡にて分明なり。

女 たか むめ腹 元文三戊午年生

川崎屋 當年四十六歳存生

法名 妙閑貞昌 「下十八オ

男 むめの腹 寛保元辛酉年生 二歳にして父柳

因に離れ、六歳にて南都に至り、九歳にて僧

と成る。川久保町念聲寺住職法譽 淨土宗知

恩院末寺 當年四十三歳存生

男 卯之吉

「下十八ウ

貞柳傳跋

雲の上まですみ登しと詠にし油煙齋てふ翁は、元日の曉ば  
かりよりして、大晦日の入相のかねまで、よつの時にわた

り、花のもとに詞の花をとくにひらかせ、月の影につきし  
なき氣色をのべて、かれとなくこれとなく、詠出給ふける  
鄙風流歌の巻のかずく、棟にみち牛に汗するとやいハ  
む。そが中膾炙」

下十九オ

するうたによて、としなミを別ち、あるハ柳の枝の糸すち  
をよりわけて、はたしりへにつりを記し、いそち餘りのい  
にし世を忍ぶ人く／＼に備へまほしくと、同じ門に遊ぶ友な  
る都の仙果亭のぬし、是を顕して一帖となし、貞柳傳と呼  
ぶ。巻のすゑに筆をとりねとあなれど、素より鶉衣のたけ  
なきざえなれば、横槿のえこそことハりを」

下十九ウ

のべねといなめど、せちのもとめもだしがたく、打盤のう  
ちつけに、糊たちせざることを葉をつばなかつ事しかり  
ちり行し柳の一葉ハ言のはの海にのり得るはじめ成らめ

盤果亭拾果誌

籃果亭

栗拾

「下二十オ

「下二十ウ

たま／＼後世にしられんとするものハ、唯和哥の人のミ  
と。狂哥もまたしかり。いにしへ和哥狂歌いまだわかれざ  
る時ハ、ごちや／＼にしてともに和歌集をいせず有し。さ  
るに、栗本の株わかれてより、狂歌をもて世になれる人ま  
たすくならず。それが中に、我柳翁のミ、古今の間に獨  
歩して、此道の中興有しより、今の狂歌よむ人国／＼にひ  
ろ／＼こぼるゝも、おほくは此柳の糸の玉にもぬける露の  
よすが成べし。されバ名譽は後の世の」

下廿一オ

樵果亭栗圃

たえせじなまさきのかつら永田氏の

柳のかけによりこぞる人

「下廿一ウ

此二うたをもてそのもとめをふさぐ事になむ

如猿亭栗洞述

「下廿二ウ

故由縁齋貞柳翁や、月に雪に花に蝶鳥のそのさま／＼の風  
情に、玉のことの葉はかぞへつくすべきものかは。それが  
中に、翁の集にもれてし世の人のしるしらぬまで、花洛仙  
果のぬし、常／＼見るも聞も筆ちからにまかせて、かいっ  
けひめおかれし、その一うた毎に、折／＼の年の号月日ま  
でも添られ、あるは柳のいとつたハリし事どもまで  
書うつして、こたび梓にちりばめ、三つの巻とぞなり侍  
る。さればこれがおくのはし書せよとなん聞ふれど、もと  
より予ハ鶯にそしられ蛙にはづかしめをうくべき面ふせな  
がら、此流れに遊ぶものから」

下廿二オ

いなミもやらで

いなみ野、野中の清水それとのミ

くミてしれかしぬるいはし書

また翁を賞吟のあまり

名はくちず残すこと葉の玉柳

なびくぞ／＼たれもなびくぞ

仙果亭蔵板

(朱印)

寛政二庚戌之秋

栗嘉

京新町通二條下町

武村嘉兵衛

大坂心齋橋筋久太郎町

清水長右衛門

書林

大坂高麗橋一丁目

赤松九兵衛